

『増補 俳諧歳時記栞草』所引漢籍校読記（4）

—秋之部—

植 木 久 行

※ 江戸末期の嘉永4年（1851）、藍亭青藍^{せいらん}は、曲亭（滝沢）馬琴撰『俳諧歳時記』を大幅に増補改訂した俳諧季寄、『増補俳諧歳時記栞草』を刊行した。この『栞草』は、解説の充実と検索の簡便さ（いろは順）から、明治・大正期、頻繁に刊行され、近年では堀切実校注『増補俳諧歳時記栞草』（岩波書店、岩波文庫、2000年8月・10月、2冊）がある。

本稿は、現在のところ最も優れる堀切実校注本を底本にして、その成果を参照しつつ、この代表的な江戸歳時記『栞草』に引かれて、季語・季題の解説等に用いられた漢籍を精読した校読記である。この『栞草』は、近現代の代表的な歳時記、改造社版『俳諧歳時記』（全5冊、1933年）の古書校注や、角川書店編『図説俳句大歳時記』（全5冊、1964～66年）の考証にも引用され、大きな影響力を持った歳時記である。この校訂作業を通して、歳時記（俳諧季寄）の解説に用いられた書籍の実態も、かなり明らかになろう。

なお青藍が増補した解説中の漢籍は、ほとんどみな天明三年（1783）に刊行された三余斎^{そぶん}文撰『華実年浪草』に基づいているが、本稿では、江戸俳諧季寄の季語・季題の解説に用いられた漢籍の具体相の把握を主眼としており、『栞草』に引く漢籍がほとんど『年浪草』からの孫引きであるとしても、江戸期の季語・季題の解説に用いられた漢籍であることには、少しも変わらないからである。なお『栞草』中に見える漢籍に対する簡略な解題は、「『増補俳諧歳時記栞草』所引漢籍考」（弘前大学人文学部『人文社会論叢』人文科学篇21号、2009年2月所収）のなかで発表した。○ 本稿は、「『増補俳諧歳時記栞草』所引漢籍校読記—俳諧の字義・春の部（1）—」（『中国詩文論叢』第27集、2008年12月所収）、「『増補俳諧歳時記栞草』所引漢籍校読記（2）—春之部・夏之部—」（『人文社会論叢』人文科学篇第22号、2009年8月所収）、「『増補俳諧歳時記栞草』所引漢籍校読記（3）—夏之部・秋之部—」（『人文社会論叢』人文科学篇第23号、2010年2月所収）の続篇である。

秋之部・続（以下の頁は、堀切実校注本『増補俳諧歳時記栞草』〔岩波文庫〕下冊の頁数である）

●140頁 蘭《宗奭曰》→『本草綱目』巻14、蘭草の〈正誤〉所引《寇宗奭曰》に拠る。北宋末の『本草衍義』の語である。

《山谷曰》→北宋・黃庭堅（号は山谷道人）の「修水記」。南宋・祝穆撰『（新編）古今事文類聚』後集巻29には黃魯直（魯直は黃庭堅の字）「修水記」、『錦繡万花谷』前集巻7、総草木の条には「山谷修水記」と注される。ただ「一幹数花」を、「一幹五七花」に作る。ちなみに『豫章黃

先生文集』（四部叢刊）巻25には、「書幽芳亭」（幽芳亭に書す）のなかに見える。

●141頁 【蘭草集解正誤】（【】は引用書中に見える漢籍を表す。以下、同じ）→『本草綱目』巻14、蘭草の〈集解〉と〈正誤〉を指す。

迎へ火〔報恩經〕→未詳。後漢・支婁迦讖訳『大方便報恩經』1巻、同7巻本には見えない。

『栞草』は『年浪草』〔⑨-34〕に拠る。

〔五雜俎〕→『五雜俎』巻2、天部2。「猪陌」は「楮陌」（祭祀の時に用いる紙銭）の誤り。「女家則」は、「女家（娘が嫁いだ家）には則ち」の意。「紙」は「紙」の形訛。「陣設くる」は、「陳設くる」の形訛。いずれも馬琴『歳時記』が誤る。莆中は地名（福建省福州市の南、莆田市付近）。

●142頁 木槿《時珍曰》→『本草綱目』巻36、木槿の〈釈名〉。

●143頁 虫、虫籠〔爾雅〕→『爾雅』積虫。《疏云》→北宋・邢昺の『爾雅注疏』巻9、積虫。

「此文に対するのみ、敢て言は足なきも虫と云」の原文は、「此対文爾、散言則無足亦曰虫」。「敢」は「散」の形訛。『栞草』は『年浪草』〔⑩-76〕の誤りを襲う。対文・散言は、字義を分析するとき用いる専門用語。対文は対言・析言ともいい、近義詞のなかの微細な相異を強調し、散言は散文・渾言ともいい、近義詞のなかの共通（同義）性を求めるもの。「此れ対文するのみ、散言すれば則ち足無きも亦た虫と曰ふ」と訓読すべし。

●145頁 木欒子《蘇恭曰》→初唐の『新修本草』（初唐・蘇敬〔宋代、避諱のために蘇恭に作る〕ら奉勅撰）。『本草綱目』巻35下、欒華の〈集解〉所引《恭曰》に拠る。

棕の実《時珍曰》→『本草綱目』巻35下、無患子の〈釈名〉。

●146頁 孟蘭盆〔釈氏要覽〕→北宋・道誠撰『釈氏要覽』（仏教関係の用語・制度の解説）巻下、孟蘭盆の条。「倒懸といふ」は「倒懸を救ふといふ」の脱。ちなみに原文では、是は此、述は申、目蓮は目連に作る。『栞草』は馬琴『歳時記』に拠る。

〔事文類聚〕孟蘭盆經云→南宋・祝穆撰『（新編）古今事文類聚』前集巻10、孟蘭盆供の条に、「孟蘭盆經」と注して引くもの。（孟蘭盆經は西晋・竺法護訳『仏説孟蘭盆經』）「餓餓」は「餓鬼」の形訛（2箇所）。「孟蘭会を奉じ」は「孟蘭盆を奉じ」の誤り。『年浪草』〔⑨-35〕は正しい。馬琴『歳時記』には「孟蘭盆会」に作る。「飴餈剪糸」は「飴蠟（ラフ、または『年浪草』の蠟〔蠟の俗字〕）剪綵」の誤り。ちなみに原文では、目蓮は目連、「終に」は「遂に」、五菓は五果に作る。

●147頁 鬱金花《時珍曰》→『本草綱目』巻14、鬱金の〈集解〉。

《又曰》→『本草綱目』巻14、鬱金の〈集解〉に見える「恭曰」（『新修本草』）の語を主とし、「頌曰」の語（北宋の蘇頌・掌禹錫ら奉勅撰『図経本草』。「四月の始め苗を生ず」の部分。ただし「生ず」で切り、「苗」の字は、下に続けるべし）を冒頭に置く。「薑、黄に似て」は、「（苗は）薑の黄に似て」が正しい。

●148頁 鶉衣《荀子曰》→堀切注に『荀子』大略篇（子夏貧、衣若懸鶉）をあげるが、文字に異同が多い。本文は、ほぼ元・陰勁弦撰、陰復春注『韻府群玉』巻18、九屑、鶉衣百結の注に見えるが、「荀子曰」の3字はない。（そして「鶉のごとし」を「鶉と為る」に作る）『栞草』は『年

浪草』〔⑩-83〕に拠る。馬琴『歳時記』には「子夏家貧、衣懸鶉の如し」（太平御覽）とある。（これは『太平御覽』巻689、衣の条に、「孫卿子曰」として見えるもの。孫卿子は『荀子』の古い呼称）

●151頁 漆の花 《韓保昇曰》→『本草綱目』巻35上、漆の〈集解〉所引。五代・後蜀の韓保昇ら撰『重広英公本草』（略称は『蜀本草』）の語。堀切注がすでに指摘する。

茴香の実【本綱】→『本草綱目』巻26、穠香の〈集解〉。「小茴香といふ」まで。「肥たる茎、葉、糸の如し」の原文は、「肥茎絲葉」。絲葉は絲（絹糸）のごとき葉の意。「惟」の訓は「惟」のほうが穏当。『年浪草』〔⑩-67〕は正しい。寧夏は地名（寧夏府路。今の寧夏回族自治区）。

●155頁 残暑 [山谷詩]→北宋・黄庭堅（号は山谷道人）の「和答外舅孫莘老」（外舅の孫莘老に和答す）詩の句。堀切注がすでに指摘する。

●156頁 後の彼岸 《提謂經》→北魏・曇靖撰『提謂波利經』。散佚。初唐・釈道世撰『法苑珠林』巻88、受戒篇・八戒部のなかの功能部に引く『提謂經』。

《浄土三昧經》→北魏・曇曜撰『仏説浄土三昧經』。『法苑珠林』巻62、祭祀篇・祭祀部に引く『浄土三昧經』。「八王子」は「八王日」の誤り。『栞草』の引用ミス。『年浪草』〔⑩-38〕は正しい。

●157頁 [善導大師觀經釈]→唐・善導撰『觀無量寿仏經疏』巻3（觀經正宗分定善義卷第三）。ただし引用文は大意にすぎず、文自体はかなり異なる。「二節」は「二際」に作る。『栞草』は『年浪草』〔⑩-38〕に拠る。ちなみに『年浪草』には、「仲春」の前に「其故ハ」、「指示して」の前に「正しく」の文字がある。仲春の割注「一月」は「二月」の誤り。『栞草』の引用ミス。

後の出替【雲嶠類要に云】→『雲嶠類要』は撰者未詳。元代の作か。明・陳耀文編『天中記』巻4、中和節、乞隣の条に引かれる。「隣り貧し」まで。「本家婢を得て」は「本家の婢を得て」の意。「妻これを悪み乞て隣家に与ふ」→本来「妻」の字がない。「乞て隣家に与ふ」の原文は「乞与隣家」、乞与は連文（連言）、与える意。（この乞の音はキ、与える意）「后復本家富、隣り貧し」の原文は、「後復富、隣家貧」（後復た富み、隣家貧し）である。

野分 [月令]→『礼記』月令篇（仲秋之月）。《注》→元・陳澧撰『礼記集説』。

●161頁 化生 [五雜俎]→『五雜俎』巻2、天部2。「…をしらず」まで。【歳時記云】→歳時記は「歳時記事」。『増注三体詩』に収める唐・薛能「呉姫」詩に対する元・天隱注に『唐歳時記事』として見える。「化生といふ」まで。清・劉於義ら監修『陝西通志』（四庫全書）巻45、風俗・時令には、「唐輦下歳時紀事曰…」として見え、典拠を『全唐詩話』と注する。唐末の李綽撰『輦下歳時記』のことであろう。

《王建詩云》→唐・薛能「呉姫」詩。堀切注がすでに指摘する。『栞草』は馬琴『歳時記』に拠る。ちなみに銀範は、銀を型にはめて造る意。詩中の「拍」は満ちる意。

●162頁 蛸蟻 《時珍曰》→『本草綱目』巻41、蚱蟬の〈集解〉。本来、「青紫」の前に「色」の字がある。

●165頁 苦参引 《時珍曰》→『本草綱目』巻13、苦参の〈釈名〉。

虞美人草 【名花譜に云】→明・西湖居易主人（姓名は未詳）撰『名花譜』（不分卷）虞美人草の条。

【園史云】→明・周文華撰の園芸書『汝南圃史』^{じよなんほし} 卷10、麗春の条。園史は圃史の誤り。江戸時代、しばしば『園史』と誤記された。典拠の『年浪草』〔⑪-70〕が誤る。

【類説】→南宋初・曾慥撰『類説』^{そうぞう} 卷15に収める、北宋初^{かこうちゆう}の賈黃中口述、張洎撰^{かし}『賈氏談録』虞美人の条。「両葉撫掌して」は本来、「両葉 人のごとく撫掌して」とある。馬琴『歳時記』には、書名の類説を「題説」に誤る。

●167頁 榎^{くわりん}櫨^{くわん}の実《蘇頌曰》→『本草綱目』卷30、榎櫨^{みようき}の〈集解〉所引《頌曰》（『図経本草』）。「蒂」のルビ「ほぞ」は、果実のへたの意。「…あり。此則榎櫨也」の部分には誤脱がある。「為木瓜、無」の4字が抜け落ち、「…あるを木瓜と為し、此れ無ければ則ち榎櫨なり」が正しい。『年浪草』〔⑫-69〕には、「為木瓜」はあるが、「無」の字がない。

栗 [事類合璧] →『古今合璧事類備要』別集卷48、栗子の条。ただしこは、直接引用したわけではなく、『本草綱目』卷29、栗の〈集解〉（時珍の語）所引に拠る。

●168頁 熊栗架^{くりだな}を搔^{かく}《時珍曰》→『本草綱目』卷51上、熊の〈集解〉。「熊館といふ」まで。

●169頁 柳散^{ちり} [晋史] →『晋書』卷77、顧悦之伝（堀切注）。ただし『晋書』には「蒲柳の質」を「蒲柳の常質」に作る。南宋・潘自牧撰『記纂淵海』^{はんじぼく} 卷63、言語部・敏於應對には、「蒲柳の質、望秋先零」とあり、「晋書本伝」と注される。

●172頁 薯蕷^{やまのいも} 【救荒本草】 →「薯蕷」云々は『和漢三才図絵』^{しゆしやう} 卷102、柔滑菜・薯蕷（山薬）の条に見えるが、この部分はすでに明初・周定王朱橚撰『救荒本草』の語ではない。引用ミスである。

●176頁 山粧^{よそ}ふ [臥遊録] →南宋・呂祖謙撰『臥遊録』。明末・陶珽重輯^{とうてい}『重較說郛』（宛委山堂本）卷74所収。語は「郭熙記」で始まるように、北宋末の撰者不詳『宣和画譜』^{かくき} 卷11、郭熙（北宋の有名な画家）の条にも見える。

曼珠沙華^{まんじゆさげ} 【月令広義曰】→明・馮応京撰、明・戴任増積^{ふうおうけい}『月令広義』。ただし未確認である。

【翻訳名義曰】→南宋初・法雲撰『翻譯名義集』^{みようぎ} 百華篇第三十三。「曼珠沙華」を「曼殊沙華」に作り、「柔軟又赤華といふ」は、本来「柔軟と云ひ、又赤華といふ」（云の一字を脱する）。

【西陽雜俎曰】→晚唐・段成式撰『西陽雜俎』^{ゆうやうざつそ} 卷19、草篇。「俗人、家にこれを種ることを悪ふ」の原文は、「俗悪人家種之」（俗に人家 これを種ることを悪ふ）である。「無義草と云」まで。

●179頁 待宵《孫明復詩云》→「八月十四夜」詩（堀切注に天隱龍沢編『錦繡段』所収を指摘する）。孫明復（992～1057）、名は復、明復は、その字。『全宋詩』卷175には、「未可知」を「不可知」に作る。

●181頁 榲^{まるめろ}椀^{わん}《藏器曰》→『本草綱目』卷30、榲椀^{おつぼつ}の〈集解〉所引《藏器曰》（盛唐・陳藏器撰『本草拾遺』）。

豆引^{まめひく} 【本綱】→『本草綱目』卷24、大豆の〈釈名〉。「ホといふ」まで。ホの音はシュク。

●183頁 夏解^{ママ} [解夏] 草 [釈氏要覽] →宋・釈道誠撰『釈氏要覽』卷下、解夏草の条。「吉祥草

と名づく」まで。「^{いん}節」は草の名。(『年浪草』〔⑨-42〕には「^節」に作るが、「^節」字を正しいとする)「夏解草」は「解夏草」の誤り。『年浪草』も解夏草に作る。『栞草』は馬琴『歳時記』の誤りを襲う。

〔漳州府志〕→未詳。国立公文書館(内閣文庫)所蔵の二種の『漳州府志』(明崇禎元年刊、清康熙53年序刊)には見えない。(貝原益軒撰『大和本草』附録、巻1、草類・吉祥の条にも同文が引かれる)「四時、一色泉石…」の句読は、「四時一色、泉石…」が妥当。馬琴『歳時記』、『年浪草』〔⑨-42〕に引かれるが、いずれも「泉石の中」を「泉石の下」に作る。『年浪草』は、「おのづから花開く」の前に「定めて」の字がある。

●184頁 [字彙] →明・梅膺祚撰『字彙』申集、^{ぼいようそ}節の条。

玄兎《謝莊月賦注》→南朝・宋の謝莊「月の賦」は、梁・昭明太子蕭統撰『文選』巻13所収(堀切注)。「引玄兎帝臺」は「引玄兎於帝臺」が穏当。典拠の馬琴『歳時記』『年浪草』〔⑩-37〕にはある。

雞頭花《時珍曰》→『本草綱目』巻15、雞冠の〈^{積名}・集解〉。「春苗を生じ」以下が〈集解〉。

黄独〔鎮江府志〕→明・王^{おうれいしゅう}應麟修、明・王^{おうれいしゅう}樵纂『鎮江府志』(重修鎮江府志)巻30、物産志・菜属。「…花も実も山薬に類す」は、本来「…花も実も^{はなは}絶だ山薬に類す」とある。『栞草』の拠る『年浪草』〔⑩-62〕には「絶」の字がある。

●185頁 ^{けしまく}罌粟子^{ふうおうけい}蒔〔月令広義〕→明・馮^{ふうおうけい}応京撰、明・戴^{たいにんぞうせき}任増^{せき}積〔月令広義〕巻15、八月令(日次)、種^{ママ}罌粟^{ママ}花の条。「花盛にして繁し」は、本来「花盛下子必満」(花盛にして、^{たね}子を^{たね}下せば必ず満つ)(繁の字なし)とある。『栞草』は『年浪草』〔⑩-81〕に拠る。

●187頁 ^{ふふよう}木芙蓉《時珍曰》→『本草綱目』巻36、木芙蓉の〈^{積名}・集解〉。「芙蓉木蓮の名」は「芙蓉・木蓮の名」の意。「拒霜と名く」までが〈^{積名}〉、以下が〈集解〉である。「花牡丹・芍薬に類す」は、「花牡丹・芍薬に類す」の意。

●188頁 ^{ぶだう}蒲萄《時珍曰》→『本草綱目』巻33、葡萄の〈集解〉。

蒲萄酒《時珍曰》→『本草綱目』巻33、葡萄の〈^{積名}〉。「陶然」を「^{陶然}」に作る。通仮(音通)。酔うさま。

●192頁 ^{こほろぎ}竈^ま馬〔西陽雜俎〕→晚唐・段^{ゆうようざつそ}成式撰『西陽雜俎』巻17、虫篇。

●193頁 氷の輪〔東坡詩〕→北宋の蘇軾(号は東坡)「江月五首」其の一(堀切注)。和刻本『東坡先生詩』巻6所収。

●197頁 ^{こまつなぎ}金剛草《陶弘景曰》→『本草綱目』巻17上、狼牙の〈^{積名}〉所引。「狼芽」は「狼牙」、「其根」は「其牙」の誤り。「^{この}諸名あり」は、「^{この}諸名あり」「^{この}諸の名あり」などと訓むべし。狼牙は牙子・狼齒・犬牙・抱牙とも呼ばれたことをいう。

●200頁 ^{こんにやく}蒟蒻の花《時珍曰》→『本草綱目』巻17下、蒟蒻の〈集解〉。

《蘇頌曰》→『本草綱目』巻17下、蒟蒻の〈集解〉所引「頌曰」の語(北宋の蘇頌ら奉勅撰『図経本草』)。

●201頁 ^{えんままあり}閻魔參〔^{釈氏要覧}釈氏要覧〕→『^{釈氏要覧}釈氏要覧』巻中、閻羅王の条。

〔俱舍論〕→未詳。『栞草』は馬琴『歳時記』に拠る。『年浪草』には見えない。

〔翻譯名義集〕→南宋初・法雲撰『翻譯名義集』鬼神篇第二十一。「造悪の者、」は「造悪の者の」、もつて「以す。故に、」は「もつて以て、故に」の意。「或は遮といふ」は、本来「或は遮とやく翻す」に作る。

●202頁 あんじゆ 槐の花《王安石やく詠に云》→『本草綱目』卷35上、槐の〈積名〉の《時珍曰》に引くものに拠り、「王安石詠」の詠は「やく積」の誤り。『年浪草』〔⑩-9〕は正しい。王安石『周官新義』卷15、秋官司寇・朝士の条（面三槐、三公位焉）の注釈によれば、「槐黄」は「槐の華は黄」に作る。

《蘇頌曰》→『本草綱目』卷35上、槐の〈集解〉所引「頌曰」の語（『図経本草』）。

【爾雅】→『爾雅』積木、櫨・守宮槐の条（注も含む）「あんくわい櫨槐と名づく」は、「かいくわい櫨槐と名づく」の誤り。ただし「槐」は衍字か。「守宮槐と名づく」まで。

ゑのころあは 狼尾草《時珍曰》→『本草綱目』卷23、狼尾草の〈積名・集解〉。「守田翁の称あり」は本来、「宿田・守田の称あり」に作る。『年浪草』〔⑩-13〕も「守田翁・守田之称」に作って誤る。「ぎよくぜん巖然」は高くそびえるさま。「茎・葉…」以下が〈集解〉の中の《時珍曰》に見える語。狼尾草はまた宿田翁・守田の異名あり（積名）。「穗粒」は「穗・粒」の意。「色紫黒」は本来「色紫黄」に作る。『栞草』の引用ミス。『年浪草』は正しい。

燕尾香〔開宝本草〕→『本草綱目』卷14、蘭草の〈積名〉に見える《志曰》の語（北宋の馬志・劉翰ら奉勅撰『開宝本草』）。

●203頁 ゐのこぐさ 犬子草《時珍曰》→『本草綱目』卷16、狗尾草の〈積名・集解〉。「原野」以下が〈集解〉である。

あぐいも 青芋《蘇恭曰》→『本草綱目』卷27、芋の〈集解〉所引《恭曰》（初唐の『新修本草』）。

●207頁 天の川〔字彙〕→明・梅膺祚撰『字彙』巳集、漢の条。「天に竟す」は、「天に竟し」の意。『年浪草』〔⑨-14〕は、「竟」字に「シ」の送り仮名を付す。

【〔楊泉物理論〕】→これも『字彙』の同じ条に引く。楊泉は西晋の人。清・陳元龍撰『格致鏡原』卷2、天河の条に引く楊泉『物理論』には、「星者元氣之精、漢水之精也」（星は元氣の精、漢水の精なり）で始まり、「流る」を「隨流」（流れに随ふ）に作る。

●209頁 あふま 扇置〔太平新録詩〕→堀切補注に、明代の作詩用類書『円機活法』（明・王世貞校。『（新刻重校増補）円機活法詩学全書』）卷15、秋扇の条に見えることを指摘する。『年浪草』〔⑨-65〕には「太平新録詩」に作り、4句を引く。

●210頁 あまのかぜ 秋風〔楊泉物理論〕→北宋の『太平御覧』卷9、風の条や、清・張英ら奉勅撰『御定淵鑑類函』卷6、風の条に引く。ただし「秋氣動き」を「秋氣つよ動く」に作る。

あまのみづ 秋水〔莊子〕→『莊子』外篇・秋水篇（堀切注）。「涇流之大雨に、けいりう涇渚涯の間」の原文は、「涇流之大、みぎは兩渚涯之間」（雨は兩〔兩〕の形訛）。従って「涇流（川の本流）の大、りようししよがい兩渚涯之間（兩岸や中洲のみぎわのあたり）」と訓むべきところである。

秋声〔歐陽永叔が秋声の賦〕→北宋の歐陽脩（永叔は字）「秋声賦」は、元初・黄堅編とされる『古文真宝後集』（戦国時代から北宋に到る名文を収録）卷1、賦類に収める（堀切注）。下冊45

頁 肌寒の条に前出。

●211頁 秋の山 [円機活法] → 『円機活法』 卷3、秋色の条（堀切補注）。「秋山如画…」は、明・于謙（1398-1457）「秋光」詩中の句。明・曹学佺編『石倉歴代詩選』 卷368所収。

●213頁 蘆の花《説文曰》→後漢・許慎撰『説文解字』 [大徐本] 卷1下、葦の条には、単に「大葦也」とあるのみ。この箇所は、『字彙』申集、葦の条に「[説文] 大葦也」云々の後に見える語。明らかに誤解による引用ミスである。

茜掘《時珍曰》→『本草綱目』 卷18下、茜草の〈釈名・集解〉。「十二月苗を生じ」以下が〈集解〉である。「方茎にして」は、四角い茎の意。

通草《蘇頌曰》→『本草綱目』 卷18下、通草の〈集解〉所引《恭曰》の語。つまり《蘇頌曰》は、『蘇恭曰』（初唐・蘇敬 [宋代、避諱のために蘇恭に作る]ら奉勅撰『新修本草』）の誤り。『年浪草』 [⑩-68] は正しい。「烏覆子」は「烏覆子」の誤り。「七月を過て」は、本来「七八月に遇ひて」に作る。いずれも『栞草』は『年浪草』に拠る。

《時珍曰》→『本草綱目』 卷18下、茜草の〈釈名〉。

●217頁 秋しくの花《古文前集に、陶淵明が、採菊東籬下…》→元初・黄堅編とされる『古文真宝前集』（漢から南宋に到る古体詩を取録）五言古風短篇・「雑詩二首」の一（堀切注）。『陶淵明集』 卷3、『靖節先生集』 卷3では、「飲酒二十首」其の五に当たる。

芦の穂架 [孝子伝] →張玉書・陳廷敬等奉勅撰『御定佩文韻府』 卷65之3、蘆架の条所引に拠る。『栞草』は『年浪草』 [⑫-88] に拠る。

烏柿 [本草別録] →『本草綱目』 卷30、柿 (=柿) の後に付す「烏柿」の条の注（説明）と「氣味」であり、「別録」（『名医別録』 [撰者不詳。後漢以来の名医の諸説を集めた医書]の略称）ではない。「熏じ乾す」の前に「火」の一字を脱する。本来、「火もて（火にて）熏じ乾す」である。『栞草』の引用ミス。『年浪草』 [⑫-85] にはある。

●218頁 ささがに姫【開元遺事】→明・彭大翼撰『山堂肆考』 卷12、宴華清の条に見える。通常は「天宝遺事」下の話である（唐末・五代の王仁裕撰『開元天宝遺事』）

●219頁 五味子 [本草] →『本草綱目』 卷18上、五味子の〈釈名・集解〉。「故に名く」までが〈釈名〉に引く《恭曰》（『新修本草』）、「春苗を生じ」以下が〈集解〉に引く《頌曰》（『図経本草』）の語である。

●220頁 哉生魄 [尚書] →同じ趣旨は『尚書』（書経）周書・康誥篇の冒頭「哉生魄」の注（前漢・孔安国の伝）に見えるが、文字は異なる。『（新編）古今事文類聚』 前集卷2、月の条に、『尚書大伝』の語として見えるが、通行の秦・前漢の伏勝撰『尚書大伝』（後漢・鄭玄注）には見えない。（『山堂肆考』 卷3、月の条も同じく『尚書大伝』の語とする）『栞草』は『年浪草』 [⑩-38] に拠る。

●222頁 柘榴《時珍曰》→『本草綱目』 卷30、安石榴の〈釈名・集解〉。[北史…]の前まで。

【[事類合璧]】→『古今合璧事類備要』 別集卷42、石榴の格物総論〔潘岳賦〕の前まで）。ここは『本草綱目』 卷30、安石榴の〈集解〉に引くもの。「榴大きくして」を、『古今合璧事類備要』には「石榴包大」（石榴は包の大きさに作る。「子」は『本草綱目』に「子の形」に作る。

●223頁 《潘岳賦云》→西晋・潘岳の「河陽庭前安石榴賦并序」（堀切注）。

〔北史李祖収伝〕→初唐・李延寿撰『北史』卷56、魏収伝の誤り。「李祖収いれを納て」は「李祖収いれの女を納て」の誤り（女の一字を脱する）。「祖収が云」は「収が云」が正しい（祖の字は衍字）。『栞草』は『年浪草』〔⑩-65〕の誤りを襲う。

三七の花さんしち〔本草〕→『本草綱目』卷12、三七の〈集解〉。

●226頁 皂角さいかし《時珍曰》→『本草綱目』卷35下、皂莢の〈積名・集解〉。「樹の高さ大也」以下が〈集解〉。

〔広志〕→晋（以後）・郭義恭撰『広志』（清・馬国翰撰『玉函山房輯逸書』には『広志』下に所収）。「一種は長くして…」の前に、本来「一種は長くして肥厚、脂多くして粘る」の句がある。『栞草』は『年浪草』〔⑫-67〕に拠る。

珊瑚〔園史〕→明・周文華撰『汝南園史』卷10、珊瑚の条。園史は園史の誤り。『栞草』は『年浪草』〔⑫-64、仙蓼〕の誤りを襲う。

〔本草綱目雑草の部、百両金〕→『本草綱目』卷21の終わりに付す「雑草有名未用」のうちの「宋凶経外類」20種の一として見える。

●227頁 乞巧きつかうでん奠〔開元遺事〕→下冊218頁に前出。

●228頁 乞巧きつかうばり針、乞巧瓜〔荆楚歳時記〕→『初学記』卷4、七月七日の条や、『（新編）古今事文類聚』前集卷10、占蛛網の条所引『荆楚歳時記』。「七孔に針を穿ち」は、「七孔針を穿ち」が穩当。孔は針の穴ではなく、針を数える単位（量詞）である。『年浪草』〔⑨-18〕、馬琴『歳時記』は「七孔針」のままである。ちなみに『（新編）古今事文類聚』所引のものには、「結綵さい縷穿七孔針」（綵縷を結びて七孔針を穿ち）とあり、『年浪草』も「結綵縷〔縷の形訛〕穿七孔針」（綵縷を結びて七孔針を穿ち）とする。馬琴『歳時記』も「絲縷を結びて七孔針を穿ち」としており、『栞草』の不注意な脱略であろう。「鑄石ちゆうせき」は「鑄石ちゆうせき」（良質の自然銅、黄銅）の形訛。『年浪草』、馬琴『歳時記』は正しい。

九枝燈〔漢武内伝〕→『太平御覽』卷31、七月七日の条に引く『漢武帝内伝』（撰者未詳。『漢武内伝』ともいう）。ただし「九華の燈」を「九微の燈」に作る。ちなみに守山閣叢書本『漢武内伝』には、「九光の燈」に作る。

●230頁 桔梗ききやう《時珍曰》→『本草綱目』卷12、桔梗の〈積名〉。ただし「桔は結なり」の語は見えない。この言葉は『年浪草』〔⑨-82〕に拠る。

●231頁 銀兔ぎんと《隋煬帝云》→明末・陶珽とうてい重輯『重較說郛』（宛委山堂本）卷110に収める、撰者未詳『海山記』に、隋の煬帝作として見える「望江南八闕」其の1に見える句。作品は明・馮惟訥ふういんとつ撰『古詩紀』卷130、煬帝の条、明・張溥ちやうふ編『漢魏六朝百三家集』に収める『隋煬帝集』などにも収めるが、当該詞は小説家の作として、現在では隋の煬帝作とは認められていない。ちなみに塩谷温しん訳注『国訳晋唐小説』（国訳漢文大成第12卷）国訳唐代小説4頁の脚注にいう、「元來望江南てんの填詞は、晚唐李德裕の始めて製せし体なり、隋の時に此詞体あることなし、自らはれ小説家の言なること明白なり」と。

暉素きそ〔文選註〕月光也→『文選』卷29に収める西晋・何劭かしやう（字敬祖）「雜詩」中の句「広庭発暉

素（広庭に暉素^{おほこ}発る）」の李善注に「暉素、月光也」とある。

金波〔前漢書〕月光也→『漢書』（前漢書）卷22、礼楽志2、「郊祀歌十九章」（其の11）の「天門」に、「月穆穆以金波」（月は穆穆として以て金波なり）とあり、唐の顔師古注に「言月光穆穆若金之波流也」（月は穆穆として金の波の流るるが若きを言ふ）とある。

霧〔爾雅孫炎註〕→『爾雅』積天、風雨の条。孫炎註は衍字。『爾雅』の本文である。「地に应ぜざる」は「地応ぜざる」、「地氣、天に発して应ぜざる」は「地氣発して、天应ぜざる」の誤読。

●233頁 碓^{きぬた}〔字林〕→西晋・呂忱撰『字林』。明・楊慎撰『丹鉛総録』卷20、詩話類、搗衣の条、清・陳元龍撰『格致鏡原』卷52、搗衣杵に引く『丹鉛総録』などに見える。「米を舂が如し。然るに、」の原文は、「如春米然」。「米を舂が如く然り」と訓むべし（如…然で、～のようだの意）。『葉草』の抛る『年浪草』〔⑩-41〕には、「兩女相對して」を「兩女子対立して」に作る。

●234頁 銀杏^{ぎんあん}の実《時珍曰》→『本草綱目』卷30、銀杏の〈積名〉。

啄木鳥^{きつつき}《時珍曰》→『本草綱目』卷49、啄木鳥の〈積名・集解〉。「劉裂て」は「斷裂て」の誤り。『葉草』の引用ミスである。『年浪草』〔⑩-88〕は正しい。「禽經云」の3字は、ここでは衍字。「小なる者」以下が〈集解〉で、『禽經』の語ではない。ちなみに〈積名〉には「禽經云、鴛志在林、鷓志在水」とあり、『年浪草』にもある。『葉草』の引用ミスである。鴛^{れつ}はキツツキの別名。

●235頁 菊花^{きく}の宴〔列仙伝〕→前漢末・劉向撰とされる『列仙伝』卷上、彭祖の条。本来、「姓は錢」は「姓は錢」、「周に至り」は「殷末に至り」に作る。

●236頁 菊花^{きく}の酒〔統齊階記〕→南朝梁・吳均撰『統齊階記』。『重較說郛』（宛委山堂本）卷115に収める『統齊階記』九日登高の条、清・陳元龍撰『格致鏡原』卷54、囊の条所引などに見える。馬琴『歳時記』にはほぼ見えるが、「遊学すること累年」の累年の語はない。

●237頁 菊花^{きく}《時珍曰》→『本草綱目』卷15、菊の〈積名〉。「鞠といふ」まで。

【陸佃埤雅云】→北宋・陸佃撰『埤雅』卷17、鞠の条。ただし文字はあまり一致しない。「月令」の前まで。馬琴『歳時記』に見える。

【月令】→『礼記』月令篇（季秋之月）。「黄華あり」まで。

●238頁 【本綱】→『本草綱目』卷15、菊の〈集解〉。「冬菊の分あり」まで。「…葉・花の品々」は、本来「…葉・花・色の品々」に作り、「青・緑の残あり」の残は「殊」の誤り。『葉草』は『年浪草』〔⑫-53〕の誤りを襲う。

●239頁 秋牡丹^{きぶねぎく}【農圃六書】→明・周之瑛纂『農圃六書』卷1、草木花部・秋牡丹の条。

●240頁 金柑^{きんかん}《時珍曰》→『本草綱目』卷30、金橘の〈集解〉。

枳殼^{きこく}〔本草図経〕→『本草綱目』卷36、枳の〈集解〉に引く《頌曰》（北宋・蘇頌^{そしやう}・掌禹錫ら奉勅撰『図経本草』の語）。

●242頁 弓張月〔積名〕→後漢末・劉熙撰『積名』卷1、積天、弦の条。ここは『初学記』卷1、月の条、『芸文類聚』卷1、月の条所引に拠るか。『積名』には、「弓の弦^{つる}を張^{はる}が如きなり」を「若

張弓施弦也」(弓を張り弦を施すが若きなりに)に作る。

●243頁 袖 [説文] → 後漢・許慎『説文解字』〔大徐本〕卷6上、袖の条。「酢し」まで。

●245頁 鼠尾草《時珍曰》 → 『本草綱目』卷16、鼠尾草の〈積名〉。

《韓保昇曰》 → 『本草綱目』卷16、鼠尾草の〈集解〉に引く《保昇曰》。五代・後蜀の韓保昇ら撰『重広英公本草』(略称は『蜀本草』)の語。堀切注に指摘。

●247頁 囊荷の花 [周礼] → 『本草綱目』卷15、囊荷の〈發明〉の条に引く《頌曰》(『図経本草』)所引。「庶民」は「庶氏」、「喜草」は「嘉草」の形訛。(『年浪草』[⑩-1]は、前者は誤るが、後者は正しい)『周礼』秋官司寇下、庶氏の条に拠って文を改変したもの。

《宗懐謂》 → 『荆楚歳時記』(『荆楚記』)の撰者である南朝梁・宗懐の語。『本草綱目』の同条(《頌曰》)に見える。「喜草」は「嘉草」の形訛。(『年浪草』は正しい)

《時珍曰》 → 『本草綱目』卷15、囊荷の〈集解〉。

【崔豹古今註】 → 西晋・崔豹撰『古今注』卷下。「敗れざる時」の敗は、『古今注』卷下には「散」に作る。

身に入 [湛方生秋夜賦] → 湛方生は東晋の人。清・張英等奉勅撰『御定淵鑑類函』卷15、秋4、「清氣入肌」の注、もしくは清・張玉書・陳廷敬等奉勅撰『御定佩文韻府』卷56、「凄凜」の注所引に拠る。「灑林」の前に「風」の字を脱し、後に「而」を脱する。(上下の二句は六言の対句表現)『栞草』の引用ミス。『年浪草』[⑩-34]は正しい。

三日月《朏魄、文選月賦に出づ》 → 『文選』卷13に収める南朝・宋の謝莊(字は希逸)「月の賦」に、「朏魄示沖」(朏魄 沖を示す)とある。

[礼記の注] → 当該句に対する唐の李善注所引。本来、『礼記』郷飲酒義第45の鄭玄注である。

《向云》 → 向は唐の呂向。『文選』の注釈者、いわゆる五臣注の一人。「明生す」は「明生ず」が穩当。

●248頁 蚯蚓鳴 [積名] → 『本草綱目』卷42、蚯蚓の〈積名〉。ここは後漢末・劉熙撰『積名』ではない。

《時珍曰》 → 『本草綱目』卷42、蚯蚓の〈積名・集解〉。

【東方虬賦云】 → 東方虬は唐の人。じつは「其鳴くこと…」の前に本来「乍逶迤而鱗曲、…」の句がある。『年浪草』[⑩-78]にもある。「其鳴くこと…」は、すでに東方虬の賦ではない。

『栞草』の引用ミスである。賦の名は「蚯蚓の賦」(『文苑英華』卷142、虫魚4、『(新編)古今事文類聚』後集卷50所収)。「孟夏はじめて」以降が〈集解〉である。

●250頁 水始涸 [月令] → 『礼記』月令篇(仲秋之月)。

●252頁 二星 [月令広義] → 明・馮応京撰、明・戴任増釈『月令広義』卷14、七月令(日次)・双星の条。【焦林天斗記】 → 書名か。未詳。『焦林天斗記』にも作る。

二星の屋形「唐の天宝…」 → 『(新編)古今事文類聚』前集卷10、七夕・古今事実、穿針乞巧の条に拠るか。同条には典拠名を記さないが、『開元天宝遺事』(天宝遺事卷下)「乞巧楼」の条である。ちなみに、清・陳元龍撰『格致鏡原』卷19、楼の条には「天宝遺事」とする。ちなみに「天宝年中」は、「天宝宮中」(『年浪草』[⑨-18])の誤りであろう。

●253頁 秋海棠 [名花譜] →明・西湖居易主人 (姓名は未詳) 撰『名花譜』 (不分卷) 秋海棠の条。「嬌姿」を「嬌冶」の誤り。「粧を捲がごとし」の捲は「倦」 (倦む) の形訛。『栞草』は『年浪草』 [⑨-76] の誤りを襲う。本来「明春」の次に「即ち」の字あり。

●254頁 檗柿 [時珍曰] →『本草綱目』卷30、檗柿 (= 柿) の〈釈名〉。「即ち柿にして」は、本来「即ち柿の小にして」、「惟熟す」は「惟だ此れのみ熟す」、「これを漆柿といふ」は「これを柿漆といふ」、「漆の名」は「漆柿の名」に作る。いずれも『栞草』の引用ミスである。『年浪草』 [⑩-9] は正しい。

しら露 [李白詩] →唐・白居易原輯、宋・孔伝統輯『唐宋白孔六帖』卷2、露の条所引。和刻本『分類補注李太白詩』卷2、「古風」 (其の23) には、「如玉」を「白如玉」 (白きこと玉の如し) に作る。

●255頁 常娥 [淮南子] →前漢・淮南王劉安撰『淮南子』覽冥訓。初唐・歐陽詢ら撰『芸文類聚』卷81、葉の条にも見える。

[後天文志] →『後漢書』天文志。これは、南朝宋・范曄撰『後漢書』の本文ではなく、南朝梁・劉昭が范曄撰『後漢書』に注釈を施したとき、欠けていた志 (種々の専門事項の記録) に西晋・司馬彪撰『続漢書』 (後漢時代の歴史書) 中の志をあて、これにも注釈を加えて、史書の体裁を整えたものである。これが現行本『後漢書』120巻であるが、この部分は司馬彪撰の本文ではなく、劉昭の注補に見えるもの (天文志上)。ただし嫦娥は姮娥、不死之薬は無死之薬など、文字には異同がある。ここは、『康熙字典』卷6、娥の条 (後漢天文志) 所引に拠るか。2条は、ほぼ馬琴『歳時記』に見える。

●256頁 鹿 [格物論] →『古今合璧事類備要』別集卷78、鹿の条の「格物総論」。ちなみに別集は南宋・謝維新撰ではなく、南宋・虞載撰である。「十二辰八卦」は、本来「十二辰及び八卦」に作る。

鹿狩 [白虎通] →後漢・班固ら撰『白虎通』 (白虎通義) 卷上、郷射 (和刻本は卷2) 。

鷓 [陳蔵器拾遺] →『本草綱目』卷48、鷓の〈集解〉所引《蔵器曰》。唐の『本草拾遺』の語である。「汎塗」は「泥塗」の形訛。『年浪草』 [⑩-79] は正しい。『栞草』の引用ミスである。

《時珍曰》 →『本草綱目』卷48、鷓の〈集解〉。

《時珍曰》 →『本草綱目』卷48、竹雞の「附録」として見える杉雞の条。

【臨海異名志】 →三国呉・沈瑩撰『臨海水土異物志』。名は「物」の誤り。単に『異物志』ともいう。「頬青正色」は「頬正青色」 (頬は正に青色) の誤り。いずれも『年浪草』 [⑩-81] は正しい。ちなみに張崇根『臨海水土異物志輯校』 (農業出版社、1981年) には、本条を収める (杉雞104)

●260頁 秋社 [月令広義] →『月令広義』卷15、八月令 (節令) ・秋社の条。「五戌」は「五戊」の誤り。『年浪草』 [⑪-36] は正しい。「秋社とす」まで。

《註に云》 →『年浪草』 [⑪-36] に、「月令曰、択元吉命民社 (元吉を択んで民に命じて社せしむ)。注云」として見えるもので、『月令広義』に見えるものではない。ちなみにこの注は、

『礼記注疏』卷15、月令篇（仲春之月）に見える鄭玄の注。ただし「農を祈る」のは春社であり、それを秋社の条に引くのは穏当ではない。

紫苑しきん《蘇頌曰》→『本草綱目』卷16、紫苑の〈集解〉所引《頌曰》（『図経本草』）。

●263頁 鷓鴣しやこ《蘇頌曰》→『本草綱目』卷48、鷓鴣の〈集解〉所引《頌曰》（『図経本草』）。
「鶉うづらの如し」は、本来「頭うづらは鶉の如し」に作る。『年浪草』〔①-96〕も欠く。

《時珍曰》→『本草綱目』卷48、鷓鴣の〈積名・集解〉。「鷓鴣、飛とぶときは」は、本来「鷓鴣、按ずるに禽經に云ふ、…飛とぶときは」とある。「晋南」は「晋安」（福建省の地名、泉州付近）の誤り。『栞草』は『年浪草』の誤りを襲う。【張華注に云】→『禽經』に対する注である。「…北に徂ゆかず」まで。ちなみに『禽經』は鳥類の專著で、南宋末の左圭編『百川学海』所収。周・師曠撰、晋・張華注と伝える。唐宋時代の偽作か。

●264頁 「性、霜露を畏れ」以下は〈集解〉。「行不得歌」は本来、「行不得哥」に作る。『栞草』の引用ミスである。『年浪草』は正しい。

【字彙】→明・梅膺祚撰『字彙』亥集・鴿の条。「飛で止む」まで。「其飛数」のまえに、本来「陸佃云」とある。陸佃は北宋の人、『埤雅ひが』の撰者。

●266頁 十三夜【天辺将満一輪月】→南宋・孫奕撰『示兒編』卷10、誕生日の条に、「吳叔經人に代りて寿を作す。詩に曰く、『天辺将満一輪月、世上還鍾百歳人』」と見える。ちなみに「高潔云」の高潔は、『歳事記三潮草みしおぐさ』（文化3年〔1806〕）の著者、小野高潔。

【光彩遍空輪将満】→北宋の宋綬編・南宋初めの蒲積中統編『古今歳時雜詠』卷30、中秋の条に、白居易「中秋夜同諸客玩月」詩の後に置かれた、「次韻」と題する詩句。ただし作者名を欠く。「光彩遍空輪欲満、青霄映出皎雲端」云々とある。南宋の撰者未詳『錦繡万花谷』後集卷1、月の条所引の句には「出白樂天」と注されるが、穏当ではない。

【明の十二家詩】→明・魏懋忠編『明十二家詩選』（万曆24年〔1596〕序刊）。

【鄭少谷、何大復が十三夜の月を翫ぶといへる詩】→明・鄭善夫撰『鄭少谷集』卷3に収める「十三夜玩月」詩、明・何景明撰『何大復集』卷1に収める「十三夜对月」詩を指す。ちなみに『鄭少谷集』と『何大復集』は、前掲の『明十二家詩選』所収。

●270頁 しら菊【花史左編】→明・王路撰『花史左編』卷4、花之辨の、「附百菊集譜〔周師厚撰〕」。「新羅、… 純白」の部分。

椎しひの実、椎柴、椎の葉【閩書】→明末・何喬遠撰（福建省全体の詳細な地方志）。

【閩書南山志】→『閩書』南産志の誤り。引用箇所は卷150、南産志上。150・151巻のみを抜き出した和刻本『閩書南産志』2巻（都賀庭鐘の訓点傍訓、寛延4年〔1751〕刊）もある。ここは大意。

●271頁 新米〔食療本草〕→『本草綱目』卷22、粳の〈發明〉所引。『食療本草』は、盛唐・張鼎が初唐・孟詵撰『補養方』（散佚）を補訂した書。

●272頁 楸ひさぎの葉を戴く〔夢華録〕→南宋初・孟元老撰『東京夢華録』卷8、立秋の条。ただし「唐の時」の文字はなく、「京師」を「満街」に作り、「兒童」の下に「輩皆」の2字あり。『（新編）古今事文類聚』前集卷10、戴楸葉、明・彭大翼撰『山堂肆考』卷12、戴楸葉の条に引く『夢華

録』もほぼ同じ。「唐の時」は衍字である。『栞草』は『年浪草』〔⑨-68〕の誤りを襲う。

一葉^{ひとば}〔淮南子〕→南宋末・胡繼宗の編、明・陳玩直の解『（京本音釈註解）書言故事大全』卷10、時令類・秋（一葉知秋）の条（陳玩直の解に「一葉者、梧葉也」とある）、南宋末・陳元靚撰『歲時広記』卷3、一葉落の条、明・彭大翼撰『山堂肆考』卷12、一葉落の条に見える。堀切注に指摘されるように、『淮南子』説山訓に見える語（一葉の落つるを見て、歳の將^{まさ}に暮れんとするを知る）とはかなり異なり、原典からの直接引用ではない。ちなみに『唐詩鼓吹』卷6、杜牧「閨情代作」詩の第1句「梧桐葉落雁初歸」に対する元・郝天挺の注に、「淮南子、梧桐一葉落而天下知秋」とある。

●273頁 楸^{ひまぎ}《時珍曰》→『本草綱目』卷35上、楸の〈積名〉。

【品字箋】→清・虞德升撰『諧声品字箋』六声第三十一。

蝟^{ひぐらし}【時珍曰】→『本草綱目』卷41、蚱蟬の〈集解〉。「青緑なる者」まで。

【爾雅註】→『爾雅』積虫、「蠶は、茅蝟なり」の東晋・郭璞注（似蟬而小、青色）。

●274頁 菱^{ひしとろ}取《時珍曰》→『本草綱目』卷33、菱実の〈積名・集解〉。「菱」（2箇所）は「菱」、「凌角」は「菱角」に作る。「自ら湖中に生ず」以下が〈集解〉。

糝^{ひみ}《時珍曰》→『本草綱目』卷23、糝子の〈集解〉。「菱黍」は「菱・黍」の意。「簇^{ちくま}りて粟の穂の如し」は、本来「簇^{そうそう}として穂を結びて粟の穂の如し」に作る。

●277頁 錐^{ひよよくり}栗《時珍曰》→『本草綱目』卷29、栗の〈集解〉。ただし「尖^{とが}らざるを」を「末の尖れる者を」に作る。『年浪草』〔⑫-74〕が「末尖者」を「末尖者」に作って返り点を付した誤りを、『栞草』が襲ったもの。

●278頁 榼^{ひよんのみ}藤《時珍曰》→『本草綱目』卷18、榼藤子の〈積名・集解〉。「紫黒色」以下が〈集解〉。「徧也」は「徧^{へん}也」の形訛。徧は狭小の意。

【〔広州記〕】→晋・裴淵撰『広州記』（広州〔広東省〕の地方志）。本来、〈集解〉には、「蔵器曰、按広州記」とある。唐の陳蔵器撰『本草拾遺』に引かれたもの。「藤に似て樹につく」は、本来「藤^{つる}を作して樹につく」、「通草のごとし」は「通草の藤^{つる}のごとし」に作る。『年浪草』〔⑫-78〕は正しい。『栞草』の引用ミスである。

穉^{ひつち}【字彙】→明・梅膺祚撰『字彙』午集・秝^ふの条。秝は秝の形訛。

●279頁 桃^{のみ}の子《時珍曰》→『本草綱目』卷29、桃の〈積名〉。「桃の性早、花植^{うゑ}安くして」の原文は「桃性、早花易植」。従って「桃の性、早く花さき、植^{うゑ}易くして」が妥当。『栞草』が「早」を「早」に誤ったのは、『年浪草』〔⑩-21〕の誤字を襲ったもの。「木兆^{うゑ}に従ふ」は「木・兆^{うゑ}に従ふ」意。

●280頁 望^{もちつき}月《説文》→『説文解字』〔大徐本〕卷8下。「君に朝するが如し」の原文は、「以朝君也」（以て君に朝するなり）、「壬は朝するなり」の原文は「壬朝廷也」（壬は朝廷なり）に作る。『栞草』は『年浪草』〔⑪-12〕に拠る。

藻^{すむ}に住虫音^ねに鳴^{なく}〔本草約言〕→明・薛己撰『本草約言』。筆者未見。『栞草』は『年浪草』〔⑩-77〕による。

●284頁 紅葉^{りくでん}かつちる【陸佃^{りくでん}が埤雅に】→北宋・陸佃撰『埤雅』卷7、鶡^{かつ}の条。

●286頁 施餓鬼 [俱舍論頌] →唐・玄奘訳 (世親菩薩造) 『阿毘達磨俱舍論本頌』 分別世界品第三。それは「五百」まで。「鬼は月を日とす。五百…」は、「鬼は月を日として五百」であろう。

撰待 [仏祖統紀] →南宋・志磐撰『仏祖統紀』巻18。撰待は「接待」にも作る。『葉草』は馬琴撰『歳時記』に拠り、『年浪草』 [⑨-7] は「接待」に作る。

●287頁 洗車雨、洒涙雨 [天中記] →明・陳耀文編、屠隆校『天中記』巻8、雨の条。典拠を『歳時雜記』 (北宋・呂希哲撰) と注する。

●290頁 栴檀の実 [時珍曰] →『本草綱目』巻35上、棟の〈積名〉。「金鈴」は「小鈴」の誤り。『葉草』は『年浪草』 [⑫-71] の誤りを襲う。

●291頁 水灯会 [月令広義] →『月令広義』巻14、七月令 (日次)、水灯の条。「斎供を門前に羅、或は垆衢の所」の原文は、「斎供門外或垆衢之処」。従って「門外或いは垆衢の処に斎供す」となる。垆の音は通常、ケイ。垆衢は都市郊外の大道をいう。『葉草』は『年浪草』 [⑨-43] に従う。また「傷亡の野鬼を祝祀し畢りて、水燈三十六をささげ」の原文は、「祝祀傷亡野鬼、畢随捧水燈三十六」。「傷亡の野鬼を祝祀し、畢く随ひて水燈三十六を捧げ」となる。ちなみに『年浪草』の送り仮名は、「畢テ随テ」である。

相撲 [漢書注] →後漢・班固ら撰『漢書』巻6、武帝紀、「(元封)三年の春、角抵戲を作す」の、後漢末・文穎の注。ただし「射騎に觚、戲とす」は、単に「射御に角ぶ」であり、角觚を角抵に作る。『葉草』は馬琴撰『歳時記』に拠る。

[事原] →北宋・高承撰『事物紀原』巻9、角觚の条。「楽を角力戲・俳優戲をなす」は、本来、単に「作楽角觚」 (角觚を作し楽しむ) とあるのみ。『葉草』は馬琴撰『歳時記』に拠る。

[史記] →『史記』巻87、李斯列伝。ただし本来、「二世在甘泉、方作觶抵・俳優之觀」 (二世甘泉に在りて、方に觶抵・俳優の觀を作す) とある。觶抵は角觚と同意。

●294頁 芒 [爾雅] →三国魏・張揖撰『広雅』の誤り。その巻10、積草。『葉草』は『年浪草』 [⑩-43] の誤りを襲う。「芒といふ。杜榮也」は、『爾雅』巻8、積草、「苳は、杜榮なり」に拠る。

《時珍曰》 →『本草綱目』巻13、芒の〈集解〉。「鋒刃」は「鋒刃」の形訛。『葉草』は『年浪草』の誤りを襲う。

●298頁 爵入大水為蛤 [月令] →元・陳澧撰『礼記集説』月令篇の注。「為潜物」まで。戌月は陰曆九月をいう。「九月節」は『年浪草』 [⑫-51] の語。

[補注]

『年浪草』 (『華実年浪草』) は、尾形侑・小林祥次郎共編『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引』 (勉誠社、1984年) に収める影印本を使用し、 [②-52] などは索引用に付された同書の番号である。ちなみに馬琴撰『歳時記』 (『俳諧歳時記』) も、同書所収の影印本を用いた。